

宝物の時間を支えてくれたのは……。

かとう ゆみこ イラストレーター

「おっ！ いい顔してますねっ！
まだおぼえてませんねーっ！」

「あ、おはようございます」と廊下で挨拶を返しながら思う。

「んっ!? いい顔っていうのはこの私の顔のことっ!？」

耳の記憶を反芻する間にも、声の主はすでにベッドの父の顔を覗き込んで「おっはようございますっ!」の挨拶です。す、すばやいっ! 父がにっこりとして、一時帰宅 2 日目の朝が始まりました。

その日午前 3 時頃から父のそばについていた私は、向こうの部屋で一眠りすることにしました。だって、訪問看護師さんがいらして父と家族たちはもちろん、玄関、廊下、父がいる部屋、その隣の居間や台所やネコまで、彼女の朝の挨拶の洗礼を受けて、たちまち活気づいているのですから。いい一日が今日も展開されるに決まっています。眠さを吹き飛ばして早く合流したいではありませんか。

■多くの医療スタッフに支えられて

父は今年の 5 月に 84 歳で旅立ちました。その前日まで娘たちと一緒に歌を歌い、笑い、また次に生まれ変わる時にも父になってくれると約束をしておきました。

「歌う」といっても人工呼吸器を装着しているから声は出せません。もはや手の指先ひとつ動かす体力もありません。下唇がかすかに 1~2 ミリ動くだけですが、歌詞ときちんと連動していることがわかりました。「笑い」は口角がわずかに上がることで。そして約束をしてくれた「うなづき」は、そんな状況でも絶えず目に笑みを浮かべている父が余りに愛おしく、思わず父の額に自分の額を当てて話したらうなづいていることがわかったからでした。

父はその 1 週間前の 2 日間は自宅にいました。48 時間だけの一時帰宅でしたが、多くの医療スタッフに支えられて実現した父との時間は、残された家族にとってはかけがえのない宝物になりました。

■春には自宅に？

帰宅は脳出血で倒れて以来半年間、一時も手放さなかった父の望みでした。しかし、年齢相応分ため込んでいた持病に左手足の麻痺と嚥下障害が加われば、入院してそれらの障害と根気よく向き合うしかないとな人も家族も覚悟していました。その甲斐あってか発症後 50 日目には嚥下リハビリ食を摂るまでに回復しました。しかし肺への誤飲があり、頻繁に父の経口食はお休みになりました。

お腹が空く父は家族に苛つきながら水を要求しました。主治医からは止められていましたが、父がかわいそうで、家族は看護師たちの父への手当ての技を懸命に見習い、それを実行しました。例えば超やわらかい毛の歯ブラシに水を含ませ、トントンと叩いて毛細管現象以下にして吸わせました。父はその微量の水道水を「甘露の如し」と表現したものです。そして機嫌がいいと麻痺のない右手で孫たちと握手を交わしては、その思いがけない握力で驚かせ、得意な表情を浮かべました。

このまま回復していけば、春には自宅に帰れると誰もが思えるような日々もありました。

■胃ろう手術から人工呼吸器装着へ

その思いが崩れ去ったのは、栄養補給をしようと受けた胃ろう手術でした。腹膜炎を起こし再手術となりました。そして動脈に触れてしまい大出血。緊急の再々手術。父は人工

呼吸器装着の身になってしまいました。父と一緒に暮らしているのは弟一家ですが、弟が憤りました。皆も同じ気持ちでした。が、父だったらこういう時にどんな行動をとるかを一番先に思い出してくれたのは義妹でした。起こってしまったことは二度と繰り返さないためにも検証は怠らない。同時にいつまでも悔やむところに留まらず、その時点での最善を将来のために尽くす父でした。

義妹は、あれほど帰りがっていた自宅に父を連れ帰ろうと動き出しました。父に気力をみなぎらせて、病状を好転させることを目論んだのです。主治医に帰宅を訴えました。しかし、人工呼吸器をつけモニターで常に監視が必要な病人の帰宅は論外のようなでした。義妹を中心にして、父の帰宅大作戦が始まりました。

■帰宅プロジェクトチームの結成

家族が口々に帰宅を訴え、院長と主治医に宛てた直訴状も書きました。その甲斐あってか院内に帰宅プロジェクトチームが作られました。「お父さん良かったね! お家に帰れるんだよね!」

父はすぐには飲み込めなかったようですが、意味がわかって目を大きく見張ってにっこりしました。家族は決意しました。何をさておいても絶対に実現させよう!

■しかし、余命は……。

実行日は 1 週間後ぐらいかと計算しました。家族の一人が去痰と胃への食事補給の手技を訓練しなければなりませんし、病院側の準備もあるでしょう。メールが飛び交い家族は父の帰宅に向けて全員スタンバイしました。ところがなかなかその日はやってきません。なんと 1 か月が経過してしまいました。そしてその

今年のお正月の父。水道水を「甘露の如し」と言っていた頃です。ちょっと痩せています。父が自宅に帰ってきた日は医療スタッフの皆さんがいてくださったゆとりからストレッチャーで運ばれる父の写真など14, 5枚あるのですが、その後の写真はありません。もう皆が父が家にいること自体がうれしくて、父との会話や歌に専念して、あるいは体調が変化しやしないかに全神経を向けたからか、常時家族8~9名はおりましたのに、1枚も在宅で療養する父の写真がないのです。これは今回の思わぬ発見でした。



挙句聞かされたのは「余命1~2週間、帰宅は不可能」との主治医の言葉でした。

この1か月、帰宅だけを楽しみに命をつないだであろう父の胸中を思えば、家族の胸は張り裂けそうでした。涙と鼻水でぐじゅぐじゅになりながら、父の命がこちらにある内に実行してくださいと願願しました。ここに来て、初めて主治医が自分たちの勘違いに気づきました。重篤ながらもそれなりの安定にもっていったの帰宅、そして自宅での療養そのものを願っていたのではなく、この患者の家族が願っていたのはただひたすらに、敬愛する父親の望みを叶えることだったのだと。

その後の病院側の対応は、前例のないことに戸惑いながらも誠実なものでした。

■父が帰って来た！

病院ではほぼ目を開けることもなくなっていた父が、家に帰ってきた途端に目を開けました。うれしくなった私たちが口々に叫びました。

「お父さんお家だよ！ 本当に本当に帰って来れたんだよ！」

仰向けのままですが父は首を回して部屋を眺め回しました。家族はもちろん、主治医も看護師も医療機器関連の方々もそこにいたみんなが笑いました。家の真ん中の部屋に父が

帰って来た。しかも父ははっきりと帰ってきたことをわかってくれたのです。家中に笑い声が響き渡りました。遠くの孫たちが、入れ代わり立ち代わり祖父に会いに戻ってきました。内孫の甥っ子は、バイトに遅れると言いながら廊下を走りまわり、「じいちゃん、行ってくる」といつもらしい挨拶。

洗濯機が回り、TVの音が流れ、台所では炊事の音、家の外では自分の仕事を継いだ息子の立てる物音が響いています。いつもの何気ない日常生活雑音に囲まれた父は、穏やかな表情を一度も絶やすことなく、時々目を開けて家族の話に微笑み、そして眠りました。

■忘れられない看護師さんの言葉

そんな父と私たち家族を直接に支えてくださったのが訪問看護師の方たちでした。夜中起きていたであろう家族へのねぎらいと元気づけを兼ねた一言は見事です。来られる時はお一人ずつですが、お二人の時もありました。同時に父に向かってにっこりと、そして間合いもよろしく「ひばりで〜す！」「さゆりで〜す！」と言い、家族の「え！？」を引き出し、「見てわかりません？」との表情は大真面目で、美空ひばりと吉永小百合だと言い張りました。父を囲んで全員が大爆笑です。

妹が遠慮がちに「あのお、父は三沢あけみの歌が好きと言ったのを一度聞いたことが……」と言いました。即あけみさんにならなければいけない場面です。と思いました。ところが、「いえっ、私はひばりですっ！ あははっ」「さ・ゆ・りっ！です」

この、患者や家族に安易に迎合しない頑固さ。私たちは大いに気に入りました。大スターのお二人は、父の様子を細かに観察しつつ丁寧に手当てを施してくださいました。そうして家族だけで看ている間の父の様子を私たちの言葉の端々から掘み取り、家族の行なったケアについて「それはいいわぁ」と、さりげないエールもくださるのですが、ちょうどいい頑固さがある人たちの言葉には信頼がおけるというものです。

父との家での時間をより一層宝物にしてくれた言葉もまた、そんな中で受け取りました。

「このお家に入ってくると、お父さんを常に皆でとり囲んでいる訳じゃないのに、皆がお父さんに心を寄せて心から喜んでいる感じが瞬時に伝わります。こんな経験は初めてです。その中に入れていただいて私たちも幸せです」

北陸福井は坂井市での、この春の出来事です。

かとうゆみこ ● 東京都練馬区在住